

第2回 「ほとけの世界をいかに表わすか ～日本仏教と曼荼羅～」

野口圭也（大正大学名誉教授/真言宗豊山派南蔵院住職）

I. 仏教と仏像 図1～図5

1. 仏像が作られるようになるまで、仏像は無かった 図1・図2

最初期の仏教造形では、ブツダの姿は表現されなかった。

ブツダの伝記の造形でも、ブツダ像ではなく、シンボルで表現

最初にブツダの像が造られたのは、西暦紀元後1世紀

最初期の仏像は、梵天勧請の場面が多い

2. 日本には最初から仏像が伝えられた 図3

『日本書紀』欽明天皇十三年(五五二)十月条「献釈迦佛金銅像一軀」（仏教初伝記事）

3. 日本では木の仏像が多い 図4・図5

鑄造・石造・塑造の仏像もちろんあるが、一本の木から主要部分を作り出す一木彫の仏像が極めて多いのが特徴、特に霊木を用いる場合がある。

II. 日本の神像 図6～図8

1. もともと神像は無かった 図6 日本の神は本来特定の姿かたちを持たず、山や瀧がご神体とされ、あるいは、鏡や木や岩に依りついて降臨する存在とされていた。

2. 神はどのように表現されたか 図7 神仏習合信仰の形成と広まりに従い、奈良時代の8世紀後半から神宮寺における神像の記録があらわれるようになる。

3. 仏像と神像 図8 神仏習合信仰は地方に起こって中央へと波及したとされる。その代表的な神が宇佐八幡神で、東大寺大仏造立にも関わり、僧形八幡神像が成立した。

III. 密教の曼荼羅

1. 曼荼羅とは何か

(1) サンスクリットの「マンダラ maṇḍala」の音を写した語（音写語）。曼荼羅、曼陀羅、満荼羅、曼孥羅などとも音写される。もとの意味は、「円」とか「丸いもの」。「輪円」とか「壇」と漢訳される。

(2) 田中公明氏は、曼荼羅を「仏教で信仰される尊格を一定のパターンに配置することで、仏教の世界観を表したもの」と定義づける（『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社、2010、p.8）。

(3) 森雅秀氏は、インド密教の曼荼羅の性格について次のように述べる。

仏たちの世界のシステムを説く密教の経典があり、そのシステムにのっとって世界をイメージ化したのがマンダラなのである。はじめにシステムがあり、そこから作り出されたのがマンダラであり、単に仏の世界の景色を描いたものではないのである。

〈中略〉特定のシステムによって組み立てられた概念図であるといってもよいであろう。（『マンダラの新しい見方』法蔵館、2024、p.26）

(4) これらを受けて、密教の曼荼羅を仮に以下のように定義しておきたい。

- ①密教経典や儀軌に依拠し
- ②依拠する経典の教理と世界観に基づいて
- ③諸尊を規則的に配置し
- ④灌頂等の儀礼や修法などの密教実践に用いることを意図した
- ⑤仏（如来）・菩薩・明王・天部その他の仏教で「尊いもの」とするものたち（尊格）の集合的表現

(5) 頼富本宏博士は、曼荼羅の特徴として、次の7点を挙げる（『曼荼羅の鑑賞基礎知識』至文堂、1991、pp.29-31より取意）。

- ①空間性：曼荼羅とは、「空間・領域・場」という概念を特徴とする。一つの点や、それをつないだ線ではなく、広がりをもった空間である。
- ②複数性：曼荼羅では、中央の本尊の周囲を多数のほとけたちが、さまざまな働きをしながら取り囲んでいる。中尊のみが描かれている絵は曼荼羅とは呼ばれない。
- ③中心性：曼荼羅では、中央に本尊にあたる中心のほとけが位置して、その聖なる世界を代表する。
- ④調和性：曼荼羅は、複数要素の集合体であるが、異質の要素を包含しながら、全体的により高次の価値観によって成り立つような世界をシンボライズしている。
- ⑤動態性：曼荼羅は固定化された存在ではなく、力の動き、もしくは流れを示す、ダイナミズムを内包した世界でもある。
- ⑥交替性：曼荼羅に配置される諸尊は、それぞれが適性にかなった役割を果たしているが、時として異なる性格を持つほとけが中心に位置することもありえる。
- ⑦全体性：曼荼羅では部分はあくまで全体の一部であり、部分と全体とは表裏一体である。中央のほとけも周辺の諸尊も、同じ一つの曼荼羅を形成している。

これに、「⑧象徴性」を加えても良いだろう。曼荼羅は単に仏の世界を美しく描いた絵なのではなく、経典に説かれる教理を象徴化して表現している。

2. 曼荼羅の理念的分類 参照:ブッダグフヤ(8-9世紀)著『大日経略釈』・『大日経広

釈』・『曼荼羅法略集』.アバヤーカラグプタ(11-12世紀)著『究竟瑜伽鬘』

- (1) 自性曼荼羅：ことばや形を超越した、真理そのものとしての曼荼羅
- (2) 観想曼荼羅：密教行者の瞑想の中に作り出された曼荼羅
- (3) 形像（影像）曼荼羅：如来の大悲のはたらきによって、凡夫衆生にも認識できるように、形をもって外部に表わされた曼荼羅。「大悲胎蔵生」とは、本来は形を超越した成仏の境地を、大悲を母胎として形で表わした曼荼羅のこと。

また「観想のための曼荼羅」と「儀式のための(描かれる)曼荼羅」という区分もある。

法は本より言なけれども、言にあらざれば顕われず。真如は色を絶すれども、色を待ってすなわち悟る。(中略)密蔵深玄にして翰墨に載せがたし。さらに図画を仮りて悟らざるに開示す。(中略)和尚告げていわく、「真言秘蔵は経疏に隠密にして、図画を仮らざれば相伝すること能わず」(空海『御請来目録』)

3. 空海が持ち帰った曼荼羅 図9～図12

現在日本の密教で最も重んじている曼荼羅は、両部曼荼羅と言われる、金剛界と胎蔵の二舗で一對となっている曼荼羅。この曼荼羅は、大同元年(806)、唐から帰国した弘法大師空海によって初めて日本にもたらされた。その時に持ち帰った多くの密教経典や法具を朝廷に報告したリストである『御請来目録』には、以下の曼荼羅が挙げられている。

大毗盧遮那大悲胎蔵大曼荼羅一舗	七幅 一丈六尺	縦約 360 cm×横約 346.5 cm	図 9
大悲胎蔵法曼荼羅一舗	三幅	横幅約 147.75 cm	図 10
大悲胎蔵三昧耶略曼荼羅一舗	三幅		図 11
金剛界九会曼荼羅一舗	七幅 一丈六尺		図 12
金剛界八十一尊大曼荼羅一舗	三幅		

この内、七幅一丈六尺という巨大な曼荼羅が、「現図正系曼荼羅」として真言宗の曼荼羅の根本となった。第一回目の転写が弘仁2年(821・現存せず)、第二回目が建久2年(1191)、第三回が永仁年間(1293-1299)、第四回が元禄6年(1693)に行われている。

大悲胎蔵曼荼羅は十二院という十二のブロック、金剛界九会曼荼羅は九つの区画から構成される。大悲胎蔵曼荼羅は『大日経』、金剛界曼荼羅は『金剛頂経』という経典に基づいている。両経典は成立地や成立時期も隔たりがあり、内容も曼荼羅の構成も異なっているが、空海がセットで持ち帰って以来、真言宗では両部曼荼羅また両部大経として並び称せられて、「両部不二」と伝えられている。なお大悲胎蔵曼荼羅は胎蔵界曼荼羅とも呼ばれ、金剛界曼荼羅と合わせて「両界曼荼羅」と言われることもあるが、経典や空海の著作には「胎蔵界」のことばは見られず、「金剛界」に合わせて後代に用いられるようになったものである。

この時胎蔵曼荼羅は、大曼荼羅・法曼荼羅・三昧耶曼荼羅の三種が伝来された。これらは順次、尊像図絵・梵字・三昧耶形(諸尊のシンボル)で表現される曼荼羅。空海はこれに羯

磨曼荼羅(立体像)を加えて「四種曼荼各不離」と説いた。金剛界曼荼羅ももう一種、九会曼荼羅の中心部分の区画を取り出して少しアレンジされた八十一尊大曼荼羅が伝えられた。

4. 無言蔵大願師 (林岳・憲海 寛政 10 年[1798]～元治元年[1864])

会津の生まれ。慈雲の系譜を引く人々より教えを受け、天保 4 年(1833)に会津若松喜福院住職となる。仏画・梵字・声明の研究と実践に励み、京都六角堂能満院に仏画道場を興す。「現図正系曼荼羅をより多くの人々に知ってもらう」ために「両部曼荼羅印行の宿願を持っていた」(中村涼應・中村幸真『正系現図曼荼羅の研究』日本放送出版協会、2010 年、p.73)。大願没後、法雲阿闍梨の発願の下、弟子の大成らによって、請来本の系譜に連なる『御室版高雄曼荼羅』が明治 3 年に開板された(同書 p.70)。大願の事跡については、自在院ご住職の安住義彦師編『六角堂能満院 大願 -林岳坊憲海 大成坊憲理の足跡-』(2006)がある。

IV. 日本で展開した曼荼羅 図 1 3～図 1 6

1. 別尊曼荼羅：図 1 3 密教修法の本尊として用いられる、特定の尊格の曼荼羅。
2. 浄土曼荼羅：図 1 4 極楽浄土の情景を描いた変相図を特に浄土曼荼羅と言う。
3. 垂迹曼荼羅：図 1 5 神仏習合思想に基づき、日本の神と仏が一体となった曼荼羅。
4. 参詣曼荼羅：図 1 6 著名な寺院や神社の境内の様相を描いたもの。

図版説明

図 1 『降魔成道』インド・ガンダシャーラー、2 世紀,ギメ国立東洋美術館蔵.東武美術館・奈良国立博物館・名古屋市博物館・NHK・NHK プロモーション編『ブッダ展－大いなる旅路』,NHK・NHK プロモーション,1998,p.26. ブッダが成道した場面. 仏像成立後の作だが、ブッダは像ではなく菩提樹の根元の空の座と仏足跡によって表現されている。

図 2 『梵天勧請』パキスタン・スワート,1 世紀、ベルリン国立インド美術館蔵.同上 p.55. 最初期の仏像の一つとかがえられている像. 向かって右が帝釈天,左が梵天。

図 3 『誕生釈迦仏立像』銅像鍍金, 像高 8.2cm, 7 世紀,愛知・正眼寺像.同上 p.90.

図 4 『薬師如来坐像』9 世紀, 福島・勝常寺蔵.東京国立博物館、NHK・NHK プロモーション・読売新聞社編『特別展 みちのくの仏像』、NHK・NHK プロモーション・読売新聞社,2015, p.42.両脇侍とともにケヤキの一木造. 巨材から全身を彫り出して割り矧ぐ。

図 5 『長谷寺縁起絵巻』六巻本,宝暦 14 年 (1764) ,奈良・長谷寺蔵. 佐藤智仙編『長谷寺 観音への祈り』,総本山長谷寺,1992,p.88.霊木を用いて造られた長谷寺本尊十一面観音像の縁起. 巻二は霊木を引いている場面.巻五は完成した観音像と眷属の龍王と童子。

図 6 『那智瀧図』1 3 世紀,東京・根津美術館蔵.根津美術館編集・発行『根津美術館百華撰 1941-1991』,1991 年,p.32. ご神体としての那智の瀧を描く。

図 7 『僧形八幡神影向図』鎌倉時代,京都・仁和寺蔵.四日市市立美術館編集・発行『姿をあらわした神々－神仏習合の歴史と美術－』,1994,p.40.奈良時代の称徳天皇の時の,道鏡皇位継承問題で和氣清麻呂が八幡神の託宣を受けた場面とされる.背後の影に注目。

- 図8 『僧形八幡神像』 快慶作,建仁元年(1201),奈良・東大寺蔵.東京国立博物館・読売新聞社東京本社文化事業部編『東大寺大仏－天平の至宝－』,読売新聞社東京本社,2010, p.106.
- 図9 『両界曼荼羅図(元禄本)胎蔵界』 元禄6年(1693),京都・東寺(教王護国寺)蔵.頼富本宏監修,東寺(教王護国寺)編集・発行『みほとけの群像 東寺の曼荼羅図』,1990/1992, p.55. 空海請来の現図正系曼荼羅の第四転写本に当たり,正月に東寺で行われる後七日御修法に用いられている.元の図像が破損が大きかったため,文献に基づいて補われている.
- 図10 『両界種子曼荼羅図 胎蔵界』 宝暦4年(1754),京都・東寺蔵..同上 p.75.
- 図11 『敷曼荼羅図 胎蔵界』 桃山時代,京都・東寺蔵.同上 p.71.三昧耶曼荼羅という.
- 図12 『両界曼荼羅図(元禄本)金剛界』 元禄6年,京都・東寺蔵.同上,p.54.
- 図13 『北斗曼荼羅図』 江戸時代,京都・東寺(教王護国寺)蔵.『みほとけの群像 東寺の曼荼羅図』,p.82.北極星を表わす釈迦金輪を中心に、北斗七星・九曜・十二宮・二十八宿を配置.延命や息災を祈願する密教修法である北斗供の本尊に用いられた.
- 図14 『當麻曼荼羅(貞享本)』 貞享3年(1686),奈良・當麻寺蔵.奈良国立博物館編集『源信 地獄/極楽への扉』,奈良国立博物館・朝日新聞社,2017,p.226.
- 図15 『吉野曼荼羅』 14世紀,奈良・西大寺蔵.奈良国立博物館編『神仏の山 吉野・大峯－蔵王権現に捧げた祈りと美－』,奈良国立博物館・読売新聞社・NHK 奈良放送局・NHK エンタープライズ奈良,2026,p.126.蔵王権現を中心に,金精明神などを順路に従って配置する.
- 図16 『熊野那智参詣曼荼羅』 16世紀,和歌山・鬨鶏神社蔵.同上 p.146.